

## 書 評

Randall E.Parker, *Reflections on the Great Depression*,  
Edward Elgar, Cheltenham,  
UK・Northampton, MA, USA

宮 川 重 義

本書は1930年代を経験したことのある、著名な経済学者に大恐慌はいかなるものであったか、それをどのように実体験を通して理解しているかを聞いた、「インタビュー本」である。インタビューの対象となった経済学者は、ポール・サムエルソン (Paul Samuelson), ミルトン・フリードマン (Milton Friedman), モーゼス・アブラモビッツ (Moses Abramovitz), アルバート・ハート (Albert Hart), チャールズ・キンドルバーガー (Charles Kindleberger), アンナ・シュウォーツ (Anna Schwartz), ジェームズ・トービン (James Tobin), ワシリー・レオンチェフ (Wassily Leontief), モーリス・アデルマン (Morris Adelman), ハーバート・シュタイン (Herbert Stein), ビクター・ザルノビッツ (Victor Zarnowitz), いずれ劣らぬ慧眼な経済学者である。

著名な経済学者を対象にした同種の本としては、Arjo Klamer, *The New Classical Macroeconomics: Conversations with New Classical Economists and their opponents*, 1984, およびBrian Snowdon and Howard R. Vane, *Conversations with Leading Economists: Interpreting Modern Macroeconomics*, Edward Elgar, 1999, がある。いずれも高い評価を得た良書である。このようなインタビュー本の良い所、あるいはその価値は、次のようなところにあると思われる。通常、慧眼な経済学者の主張した理論ないし仮説は通常その著書もしくは論文を通してしか知ることができない。だから後の研究者がさまざまな解釈をする。それは正しいかもしれないが、時にはとんでもない逆の解釈をすることさえある。例えば、J.M. ケインズの説については今日さまざまな解釈が存在する。しかしながら、ケインズ本人にあらためて確認するすべは何もない。彼はも

うこの世にはいないからである。また、個人的な対話の中では、論文に書かれていないこと、その背景をポロリと話すことがあるのである。それがその学者の理論をさらに深く理解する切っ掛けとなることがあるのである。評者の経験からもこのことが言える。

合理的期待理論が注目されていた、1980年代の初め、評者はその理論の提唱者であるルーカスの論文を何度読んでも良く理解できず、ほとほと音を上げていたころ、クラマーのあのインタビュー本に出会った。クラマーのルーカスやサージェントに対する「経済学は好きですか、経済学を研究するようになったきっかけは何ですか」で始まる、インタビューを読んで、なるほど合理的期待の本質はこのようなどころにあるのかと納得したものである。難解な数学の背後にある理論の本質がすんなりと理解できたのを良く覚えている。

さて、本書は評者の判断では三つに分けることができるように思われる。その一は、本書のタイトル通り、30年代の大恐慌を今日の視点からいかに理解するかという点である。その二は、これらの経済学者が長年の経済学の研究の結果、経済および経済学全般についてどのような考えを持つようになったかということである。その三は、彼らが経済学者としてだけでなく、1個人として、どのような人生を送ってきたかという、いわば経済学史のゴシップとでも言うべきものである。この3点から本書を紹介することにしよう。

まず、大恐慌に関して、もっとも面白いと思ったのは、ミルトン・フリードマン、それにその共同研究者である、アンナ・シュウォーツへのインタビューである。この2人はマネタリズムの総師と言える経済学者である。まず、フリードマンへのインタビューでは、マネタリズムの金字塔とも言える『アメリカ合衆国の貨幣史』について、今どのように考えているか、何か書き加えたいことがあるか、という問いかけに注目した。とくに同書第7章「大収縮」(彼らは昔から、大恐慌という言葉を使わずに、大収縮という言葉を用いている……評者注)は今日のマクロ経済学、金融政策に大きな影響を及ぼしていると思われるからである。

彼らは、そこで当時のアメリカが金融政策のルールを破ったことが、イギリスとアメリカの貿易不均衡を生み、アメリカに金融緩和を生むきっかけを作り、その後アメ

Randall E.Parker, *Reflections on the Great Depression*, Edward Elgar, Cheltenham, UK・Northampton, MA, USA (宮川) 113  
 リカでバブルを発生させ、1929年の株価大暴落を生む遠因になったと考えるが、フリードマンはこの点について、アメリカだけではなくて、当時のフランスもまたその責任の一端を担っていると解釈しなおしたいとして、つぎのように述べている。

「ええ、かなりたくさんあります。強調しておきたい一つのことは、そこではうまく強調できなかったのですが、大恐慌を引き起こしたことについての、アメリカとその他の国の相対的な責任の重さです。フランス中央銀行の総裁であったエミール・モリューの回顧録の英訳版を読んで大変感銘を受けました。私たちが『貨幣史』を書く前にもフランス語で彼の回顧録を読みました。しかし、他国の言語で何かを読んでも、微妙な点は本当に理解できません。数年前に、モリューの回顧録が英語に翻訳されましたので、これを英語で再読し、そこからより多くのものを得ました。あの大惨事を世界的に拡大した責任を—それを功績とよびたいのなら功績でも良いですし、非難と呼びたいのなら非難でも良いですが—アメリカにあまりに多く与えすぎていて、フランスの果たした役割を過少評価していたことに気がきました。このことは、決してアメリカに責任がないと言うのでは有りません。そうではなくて、もしあの本を今書き直すとしたら、もう少し違った説明をするだろうということです、つまり、あの大収縮と世界的不況はフランスとアメリカの共同責任の結果であると、書くでしょう」(pp. 46—47)。

また、大恐慌期の連邦準備銀行の主体性について、ポール・サムエルソンは、大恐慌を防ぐのに必要なマネタリーベースを増やさなかったことに対して、連邦準備を責めるのは正しくない、それは後知恵にしかすぎない、としてフリードマンを批判しているが、この点についてフリードマンはつぎのように反論している。

「それは違います。そのことが議論の対象になっていたことは間違いありません。そのような説明は現実の表面だけを述べたに過ぎません。なぜなら、ニューヨーク連銀は、それは結局連邦準備制度の一部ですが、1929年からずっと一貫して一層の拡張的金融政策を支持していたからです。ニューヨーク連銀の総裁は、ワシントンの理事会、他の連銀、それに公開市場委員会に更なる拡張的金融政策をとるように繰り返し説得して回っていました。『アメリカ合衆国の貨幣史』では、この点に関する議論をはっきりと取り上げており、他の方法を主張した人たちの名前も載せてあり

ます。ですから、彼（サムエルソン）の発言は正しいとは思いませんし、私の考えが後知恵であるとも思いません。シカゴ大学の人たちが請願書を送っていたのに、それがどうして後知恵なのでしょう。ジェイコブ・ヴァイナーが金融緩和の必要性を説く講義を行っていると言うのに、どうして後知恵なのでしょう。私はそうは思いません。このことは1931—32—33年に行われたことなのです。ポールがそのようなことを言うなんてビックリです。まさかそのような事を言うとは。いったいどこで言ったのですか」(p. 48)。

この点について、ポール・サムエルソンは、不況期には貨幣需要はある下限で水平になり、いわゆる流動性のワナが発生して、金融政策は全く無力になるとして次のように持論を展開する。「しかし政府がとても利率の低い国債を発行した時、それは貨幣と高い代替性を示します：人びとは90日の財務省証券を満期日においてさえも換金しようとはしません。私はあるとき財務省の人に『これをどのように説明しますか』と尋ねました。すると、彼は『あなたは100万ドルのもっと有利な運用方法を知っていますか』と言いました。それを現金に代えてまた新しいTBを買っても、そう、たったの37セントしか稼げないのです。このような状況の下でもM（貨幣供給）の増加がP×Qに同じように影響するなどどうして信ずることができますか。現在の日本にも同じことが言えるのですよ。私の書いた教科書、今は共著になっていますが、流動性のワナについての説明はますます少なくなってきました。もう、その説明は消滅してしまうかもしれません。しかし、今日の日本の状況がこの問題にまた光を当ててくれています。だから、私は大恐慌についてのマネタリストの分析はあまりにも単純すぎると思っています。もちろん、連邦準備には初期の段階でもっとやるべきことがあったことは認めます」(p. 31)。

この流動性のワナをめぐる論争について、アンナ・シュウォーツは次のように述べている。1934年以降、金利はゼロ近傍まで落ち、当時のアメリカ経済は流動性のワナに陥っていたのではないかと、という質問に対して、「そうね、確かに実質金利は底に落ち込みましたが、流動性のワナが生じたことは誰も立証していません。しかし、誰もそれが必然的に生ずるという確たる信念を持たないままにその考えは広まってしまったのです。でも、ケインズの信奉者たちはこの流動性のワナが大恐慌発生の理由で

Randall E. Parker, *Reflections on the Great Depression*, Edward Elgar, Cheltenham, UK · Northampton, MA, USA (宮川) 115  
あると考えた」(p. 122)と明確に答えている。さらに、もし名目金利がゼロ近傍にまで下がっているのなら、金利を通じた波及メカニズムが作用するのは難しいのではないかと、という著者の鋭い突っ込みに対しても、平然と次のように答えている。「ええ、マネーサプライを増やしているなら、金利メカニズムは作用します。それは今、日本がやっていることです。彼らは金利が0.5%になった今も、マネーサプライをどんどん増やそうとしています。それで日本もあの長い不況から抜け出すことができる」(p. 123)。それによって借入れが容易になるので、徹底して金融緩和を継続すべし、と強調するのである。

つぎに、経済学研究、および経済政策一般についてのこれらの経済学者はどのようにみているか、彼らの考え、主張をまとめてみよう。まず、誰もが一番関心があり重要と思われることは、あのような大恐慌を起こさないためには何をすべきで、何をすべきでないのかという問題であろう。とくに、長期不況の最中で苦しんでいる、われわれ日本人にとってはぜひ傾聴したい問題である。このインタビューに登場するほとんどの経済学者の答えは一致している。それは大きなインフレを起こさない、ということである。インフレが大きければ大きいほど後には大きなデフレが続くのである。物価の安定のためには、金融システムを安定させることが非常に重要である。

最近の経済学研究の潮流については、厳しい意見が続く。彼らは最近の経済学は「学のための学になっている」、結局のところマクロ経済学は1968年のフリードマンの会長講演で止まっているのではないかと、と見ている。とくにシュウォーツの次の言葉は貴重な助言として、経済学を研究するものは心しなければならぬ。「調査した統計が本当に实体经济にマッチしているのかどうかの検討をしないままに、かっこよく決める計量経済学にはウンザリですね。需要ショックと供給ショックを扱う計量経済学がとくに問題です。こういう研究を行っている人は、大恐慌中、1929年から1931年には需要ショックが起り、その後供給ショックが起ったと説明します。それで、私が需要ショックとは何で、供給ショックはどのようなものですか、と尋ねると、彼らは決まって、イヤ、それは分かりません、と答えるのです。彼らの理解は、せいぜいこの統計技法を使えば結果が出るということぐらいなのです。ですから、彼らには『納得できない』と言っています。統計結果の意味がはっきりしない限り、関心はあ

りませんね。数字からは何も分からないのです。このような不毛の計量経済学には全く不満です。彼らの多くはそうやって、自己満足しているのです。つまり、結果を得たのだと。彼らはそれを重要な結果だと思っても、私にすれば全く意味のない、ただの数字です。そして、別の研究者が現れて、この技法には問題がある、私の技法の方が優れている、などと」(p. 125)。極端な実証主義が経済学を侵食しているというのである。

不況対策について、重要な指摘がなされている。それは、同じ資産市場といっても、株式市場と不動産市場は異なるということである。不動産市場の下落は景気に深刻な影響を及ぼすのである。キンドルバーガーは次のように述べている。「不動産市場は株式市場と異なっています。というのも、不動産市場が崩壊すると、二つの市場が共に崩壊するからです。株式市場は6ヶ月あれば清算されますが、不動産市場は何年もかかります。現在の日本は、このことを示す最良の例です。彼らは1990年からずーっと、今だに不動産市場の清算に取り組み続けています。……頂点は39,000円で、底は14,000円でした。日経平均は上下しています。株式市場は大丈夫で、物価も問題ないですが、不動産は未だにひどい足かせになっています。日本はもっと最後の貸し手の機能を活用すべきだったのです。もし不動産の下落を抑えることができたなら、状況は良くなっていただろうでしょう。これが、1920年代に人々が受けた苦痛なのです。(キンドルバーガーのこの発言は、1997年8月時点……評者注)」(p. 103)。

マネーサプライを中間目標にすべし、というかつては一世を風靡したマネタリストの主張はどうなったのであろうか。著者パーカもこの点について強い関心を持っており、フリードマンに直接この質問をぶつけている。フリードマンは次のように答えている。「それは問題のすり替えです。あなたの質問は、その政策がダメになったかどうかではなくて、ダメにすべきであったかどうかです。もし過去20年間にわたってマネーサプライを安定した率で増加させていたなら、経済状況は今と同じかもっと良くなっていただろうと思います。ですから、貨幣目標が間違っていたとは決して思いません。しかし、現実問題としては、貨幣目標は廃れてしまいましたし、採用される予定もありません。それに代わって、インフレ目標というあやしげな物を採用しようとしています。今の私たちはかなりノー天気です。だって、中央銀行の持つ物価安定維持能力

Randall E. Parker, *Reflections on the Great Depression*, Edward Elgar, Cheltenham, UK · Northampton, MA, USA (宮川) 117  
 に対して、その実力以上に大きな信頼を寄せているからです。ですから、あとでガツカリすることになるでしょうね。」これに対して、パーカは「しかし、最近、貨幣の流通速度はあまりよい動きを見せていませんね」と、さらに食い下がる。これに対して、フリードマンは「それは貨幣の定義によります……金融システム規制に重要な変更がなされた1980年には、とくに要求払い預金に利子を付けることが可能になったために、M1の流通速度は完全に狂ってしまいました。M2の流通速度の方は問題がありませんでした。1990年代まで比較的安定していたのですが、その後、こちらの方もおかしくなりました。M2流通速度は急速に上昇し、マネーサプライM2は非常にゆるやかに増加しました。この4、5年の間、M2流通速度は高い水準で安定しています。これらの変化の意味を誇張して説明するのは簡単です。もし貨幣成長率が安定していれば、所得の伸びはこの4、5年のうち何年かはもっと大きくなり、その他の年では小さくなったことでしょう。しかし、所得の変動が実際よりももっと大きくなったかどうかは全く分かりません。それは別の問題です」。

最後に、本書ではこのような学術上、経済政策上での貴重な発言だけでなく、経済学者の個人的エピソード、いわばゴシップとでも言うべきものが面白く語られている。そのいくつかを紹介しよう。

アルバート・ハートは実はあのジョン・ヒックスの結婚の仲介役をしたことを面白く話している。これは多くの人たちにとって初耳であろう。彼は次のように語っている。「1931年の春、少しの間ロンドン大学経済学部滞在中、ヒックス家の人々と懇意になりました。ウルスラ・ウエップ、彼女はアイルランドのクエーカー教徒だったのですが、その彼女とは2つの思い出があります。その一つは素晴らしい合唱隊の人たちの中に私を連れて行ってくれたことでした。また、彼女は私と一緒にノルウェーにスキー旅行に行くことを望んでいました。彼女が私との結婚を望んでいるだったので、思わず断ってしまいました。私は実のところ、子供が欲しかったのですが、彼女は子供を産むには年を取りすぎていましたからね。……だから、その攻撃をうまくかわした、ということです(笑)。このことは、非常に幸運な結果をもたらしました。なぜなら、ジョン・ヒックス、私たちの世代ではまさに最高の経済学者なのですが、彼は信じられないくらい恥ずかしがり屋で、自分のことを表現するのが大の

苦手でした。そして彼にとって子供をもつことはそれほど重要であるように思われなかったのです。彼はウルスラと結婚しました。そして彼らは二人とも私達が結婚に急がなかったことをとても喜んでいました」(p. 74)。

アデルマンのインタビューを読むと、あのポール・サムエルソンは実は当時危険思想の持ち主としてブラックリストに載っていたこと、なぜ彼がハーバードの教授になれなかったか、また、工科大学である MIT の経済学部が今日どうしてあのように超一流になったのかが理解できる。アブラモビツは、結婚して初めてラドクリフで教えることが許され、給与も上がったことを話している。女子専用の大学であったラドクリフでは未婚の男性が教えることはできなかったという、今ではまったく想像できない、当時の保守的なアメリカを窺い知ることができる。

ワシリー・レオンチェフとのインタビューからは、当時多くの経済学者がケインジアンになったのに、彼は頑なに反ケインズ主義をとったのか、なぜケインズを嫌っていたかが分かる。それは、当時ケインズが編集していた、経済専門雑誌 *Economic Journal* に投稿したが、却下されたからである。編集者というのは恨みをかう役回りなのである (p. 148)。また、キンドルバーガーがドイツ侵攻の直前に妊娠中の妻を連れて必死でジュネーブからバスで脱出する際の様子、そこでのラドヴィック・フォン・ミーゼスとの出会いも非常に興味深い (pp. 89—90)。ビクター・ザルノビツのインタビューでは、彼が死のキャンプとして悪名高いアイシュビッツの町で育ち、ドイツによって家族は悲惨な目に遭い、彼自身は逃げ延びたものの、19ヶ月をロシアの強制労働収容所で過ごすことになったこと、それからアメリカに移り、景気変動の研究で名をはせることになったことが、生き生きと語られる。

このように、本書では単に大恐慌だけではなく経済学全般について、さらには現代を代表する経済学者の生きざまについて生の声を聞くことができる貴重な文献になっている。このようなインタビューを実りあるものにするには著者が十分相手の研究を理解していなければならない。この点ランダル・パーカーは用意周到でインタビューに臨んでいることが分かる。アポイントをとり、アメリカ中を駆け巡ってのインタビューは決して生易しいものではなかったと、著者の苦勞が察せられる。また、インタビューの相手は年老いたとは言えいづれも個性豊かな人ばかりである。機嫌を損じて

は成功しない、かといって気を使ってばかりでは面白さがなくなる。得意な話は誰でも長々としてくれるが、そうでない反対のことは口を閉ざしてしまうものである。評者も何度もそのような経験をしている。ところが、この点、パーカーは時には鋭く、時には柔らかく、非常に巧みに相手の言葉を引き出している。お見事としか言いようがない。ただ、本書で取り上げるに相応しい経済学者はまだ何人かいるはずである。大恐慌論争に加わった人たちである、例えば、大恐慌研究の第一人者ジョン・ケネス・ガルブレース (John Kenneth Carbraith)、大恐慌について積極的に議論を展開しているマネタリストのトーマス・メイヤー (Thomas Mayer)、アーラン・メルツァ (Allan Meltzer) などである。願わくば、彼らにもインタビューしてほしい。しかしながら、本書に登場する11人の経済学者のうちすでに6人はこのインタビュー後に鬼籍に入ってしまったので、もう彼らから再び生の声を聞くことはできない (アブラ・モビツ、2000年12月、アルバート・ハート、1997年10月、チャールズ・キンドルバーガー、2003年7月、ジェームズ・トービン、2002年3月、ワシリー・レオンチェフ、1999年2月、ハーバート・シュタイン、1999年11月、それぞれ逝去)。その意味でも本書は20世紀を代表する経済学者の発言をまとめた貴重な文献として歴史に長く残ることは間違いない。(2004年9月)